様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：３４３１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０３３０１

研究課題名（和文）地域共有の文化資源としてのアイヌ文化の歴史遺産

研究課題名（英文）The historical legacy of Ainu culture as a resource of local common properties

研究代表者
大西　秀之（Onishi, Hideyuki）

同志社女子大学・現代社会学部・教授

研究者番号：６０４１４０３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、北海道に遺されたアイヌ民族の歴史文化遺産を、非アイヌ系住民を含めた地域住民共有の文化資源として位置づけ、また活用しうる可能性を追究した。具体的には、北海道東部標津町の4地区33名に聞き取り調査を行い、アイヌ文化関連の歴史遺産に対する個々の調査対象者の個人的背景を踏まえた多様な知識・認識・価値づけを収集することができた。また調査活動に加え、同地域において報告会やプラネタリウムイベントを開催し、当該地域住民に対する成果還元を試みた。こうした社会還元を含む成果を通して、地域主体のアイヌ文化振興の可能性を提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の成果としては、従来ほとんど本格的な調査研究が行われてこなかった北海道東部地域においてアイヌ民族の歴史・文化遺産に対する地域住民の知識や評価を、それぞれの地域コミュニティの多様な背景を踏まえ収集することができたことが第一にあげられる。またこうした成果を踏まえ、本研究では、学術的な価値にとどまらず、有形無形のアイヌ民族の歴史文化遺産を、アイヌ系・非アイヌ系のエスニシティを超えた全地域住民にとっての共有資源として位置づけ活用しうる具体的な方策を、当該地域との共同によって追究することができた。

研究成果の概要（英文）：　This study examined the possibility of utilizing historical and cultural heritages of the Ainu people in Hokkaido as cultural resources shared by the local community member, including not only Ainu but also non-Ainu people. Particularly it interviewed 33 people in four districts in the Shibetsu town, eastern Hokkaido, and were able to collect variety of knowledge and values for Ainu cultural heritages based on various personal backgrounds of the individual survey subjects. In addition to such research activities, it held a debriefing session and a planetarium event in this area to give back findings to the local residents. Through these results, it was able to show the possibility of Ainu cultural promotion from the local community.

研究分野：人類学

キーワード：アイヌ文化　文化資源　歴史遺産　エスニシティ　景観保護　史跡公園　公共人類学／考古学　文化財行政

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

政治社会的にマイノリティと位置づけられる先住民文化の保護と振興は、今日、国際社会に共有の課題といっても過言ではない。こうした先住民にかかわる課題は、新興国・途上国のみならず、西欧近代の帝国主義によって植民地として建設された北米大陸や太平洋州の先進諸国においても決して無視できないものとなっている。このような背景から、当該地域の文化／社会人類学は、歴史学や考古学と共同して先住民文化の保護と振興といった政治社会的課題に応えようとする研究が積極的に推進されている。

これに対して、日本国内の先住民であるアイヌ民族を対象とした研究では、歴史学や考古学はもっぱら過去の復元や読み解きを行う一方、文化／社会人類学は主に現在に至る政治社会的課題に関心を払ってきた。このため学際研究の蓄積は、まだまだ質量とも低調であると言わざるをえない。またそれ以上に、どちらの研究領域も、アイヌ民族のみに対象や議論を限定し収斂しており、それ以外のエスニシティを有する地域住民ひいては社会全体に対してアイヌ民族の歴史文化遺産の意義を十分に提示してこなかった。

以上のような状況を踏まえ、申請者は、北海道の文化的景観を対象とした調査研究に従事するなかで、主に考古学の発掘調査によって整備された史跡公園などの遺跡を、アイヌ民族の文化の保護と振興に貢献させる可能性を追究してきた。くわえて、こうした遺跡は、アイヌ民族としてのエスニシティを有する地域住民の文化振興は言うまでもなく、それ以外のエスニシティを有する地域住民にも活用する機会があるため、地域共有の文化資源となりうることを強く意識するようになった。このような背景から、申請者は、史跡公園をはじめとする歴史文化遺産を、アイヌ系と非アイヌ系というエスニシティの違いを超えた、地域住民全体にとっての文化資源として位置づけ活用しようとする研究計画に至った。

２．研究の目的

本研究では、北海道に遺されたアイヌ民族の文化や歴史を、現地に暮らす非アイヌ系住民を含めた地域住民すべてに共有の文化資源として位置づけ、また活用しうる可能性を追究する。具体的には、申請者がこれまで調査研究を行い一定の成果を蓄積してきた、北海道東部に位置する標津町のポー川史跡自然公園を中心とする文化的景観を、当該地域に居住するアイヌ民族としてのエスニシティを有する住民と現代日本社会のマジョリティに属する非アイヌ系住民が、それぞれどのように認識し、いかなる活動を行い、どんな関係性を構築しているか明らかにする。その上で、そうした認識を生み出した背景・要因を、政治的社会的言説レベルのみならず日常生活レベルにおいて把握を試み、そこから共有資源としての認識を構築し活用しうるあり方を提起する。

以上のような目的の下、本研究では、ポー川史跡自然公園の基礎となる考古遺跡を形成したアイヌ民族の文化や歴史に対して、アイデンティティをはじめ社会的背景を異にする多様な地域住民が抱く理解と見解を明らかにする。その上で、歴史的背景の違いこそあれ北海道もまた、先史時代から現在まで多様な文化やエスニシティを担う人びとによって形成されてきたことを、ワークショップの開催や博物館施設の企画展などによって標津町周辺を中心とする地域住民に提示する。特にこの試みでは、ポー川史跡自然公園を含めた現在の当該地域の景観が、そうした多様な人びとが関与した結果であることを積極的に提起する。そして最終的に、このような知識・認識を得た多様な背景を有する地域住民が、その結果として自らが暮らす地に存在する国民共有の埋蔵文化財である考古遺跡などの歴史文化遺産を、エスニシティや文化の違いに囚われない地域共有の文化資源として新たにどう価値づけるか、当該住民を中心とする関係者とともに議論・検討する。

３．研究の方法

本研究では、まず聞き取り調査によって標津町内の各地区に暮らす地域住民が保持する、当該地域のアイヌ文化史とその関連史跡に対する多様な知識と認識の把握を試みる。その上で、そうした多様性が形成された背景を解明するため、各地区の地域性、住民個々人の日常生活や生活史、同地域のアイヌ文化史に対する文化財行政などを検討する。また同様な調査を隣接地域で行い、標津町での結果と比較することにより、それぞれの知識や認識の地域ごとの個別性と共通性を捉える。このような現地調査の成果を基に、北海道内の他地域で実施されているアイヌ文化の保護・振興の先行事例を参照しつつ、ポー川史跡自然公園を中心とする当該地域のアイヌ文化関連の史跡を、地域共通の文化資源として価値づけ活用する可能性を地域住民と共同で追究する。

具体的には、アイヌ民族か否かというエスニシティにかかわらず、地域住民がポー川史跡自然公園に対し、どんな認識や知識を有し、いかなる活動を行い、どのような関係性を形成しているか、標津町民を中心とする関係住民を対象とした聞き取り調査によって明らかにする。特に聞き取りに際しては、地域住民の多様性を捨象し単一的に捉えることを避けるために、可能な限り一人ひとりの住民の日常生活やライフヒストリーの把握に努め、その上で個々人のパーソナルな認識や知識が形成・表出された背景の抽出を試みる。これに加え、本研究では、特定の場所、モノ、諸活動との関係性の把握に努める。具体的には、概念的かつ抽象的にアイヌ民族の文化や歴史に関する知識や認識を問うのではなく、標津町内に存在する史跡やイチャルパの開催に関する知識の有無や、その場所に実際に訪れ参加したことがあるか否かなど確認し、その結果として

どのような知識や認識を持ったか、あるいは持たなかったかを明らかにする。
以上のような調査を通して、国から地方公共団までの文化財行政が提示している情報や語りを各住民がどこまで取り込んでいるか、あるいはそれらとは異なる日々の営みに基づく独自の判断や解釈がどの程度介在しているか追究する。さらには、文化庁や北海道教育委員会などが提示しているアイヌ歴史文化遺産に関する価値づけを前提とした語りと、実体験に基づく地域住民の回答がどこまで一致しているか、または齟齬があるかにも注意する。

４．研究成果

（１）2017 年度

2017 年度は、まず北海道東部に位置する標津町の「北標津」・「忠類」の二地域において、地域住民の方々21 名に聞き取り調査を実施することができた。この調査では、当該住民が自ら暮らす地に位置するポー川史跡自然公園を中心とするアイヌ文化関連の歴史文化遺産に対して、どのような知識や認識あるいは価値づけを保持しているか把握することができた。特に聞き取り調査では、同地のみならずアイヌの人々の文化・歴史に対する意識を問うとともに、その結節点となるポー川史跡自然公園そのものや同公園で開催されているクナシリメナシの戦いの犠牲者に対するイチャルパ（慰霊祭）などに対する意見などの収集を行った。
いっぽう、こうした聞き取り調査に加え、現地標津町において地域住民を対象とした公開ワークショップを開催し、調査成果の現地社会への還元を行うことができた。この企画では、単なる一方通行的な成果報告ではなく、アイヌ民族の歴史文化遺産の活用方法を考えるための地域住民の意見を収集することができた。
以上のような現地調査を基に、同年度は、次のような研究成果を公開・提示することができた。まず神戸大学で開催された日本文化人類学会第 51 回研究大会において標津町での現地調査に基づく口頭発表を行い、その成果の一端を提起した。また 2018 年度にマレーシア・ペナン（マレーシア科学大学）で開催される国際先住民会議（CHAGS）12 で、アイヌ文化の歴史遺産を対象とした公共人類学・考古学をテーマとしたセッションを企画し受理された。この他、本研究に関連する学術論文数編が、査読制の学会誌や一般書籍の論集などに掲載された。

（２）2018 年度

2018 年度は、まず北海道日高地方に位置する平取町二風谷地区において「イオル（伝統的生活空間）再生事業」を中心とする文化的景観に関連する現在までの取り組みに関して聞き取りを行い、同事業の具体的内容など概要を把握することができた。これに加え、日高管内 13 の博物館を訪問・見学するとともに、各館所蔵のアイヌ民具などの資料の来歴やアイヌ文化の振興に関する取り組みの情報収集を行うことができた。これらの調査により、本研究で実施しているポー川史跡自然公園を中心とする標津町での事例と比較する情報を得ることができた。
また国立アイヌ民族博物館準備室では、同準備室の現況や業務内容を把握することができ、標津町での調査事例の位置づけを考える情報を得ることができた。また昨年度に引き続き、ポー川史跡自然公園で現地のアイヌ系住民の方々が開催されたイチャルパを見学した。これらの調査は、過去 4 年間実施し毎年観察を行っているが、その結果ポー川史跡自然公園や同イチャルパを巡る社会状況の変化を捉えることができた。
以上のような現地調査を基に、同年度は、次のような研究成果を公開・提示することができた。まず弘前大学で開催された日本文化人類学会第 52 回研究大会において標津町での現地調査に基づく口頭発表を行い、その成果の一端を提起した。またマレーシア・ペナン（マレーシア科学大学）で開催される国際先住民会議（CHAGS）12 で、アイヌ文化の歴史遺産を対象とした公共人類学・考古学をテーマとしたセッションを主宰するとともに、個人でも口頭発表を行った。これに加え、千葉県鴨川市で開催された生態人類学会第 24 回研究大会においてポスター報告を実施した。この他、本研究に関連する学術論文数編が査読制の学会誌や一般書籍の論集などに掲載された。

（３）2019 年度

2019 年度は、まず昨年度自然災害によって実施計画を延期していた、北海道東部に位置する標津町の二地域「標津」・「山茶志骨」において現地調査を行った。この調査では、当該地域に暮らす 12 名の住民に聞き取りを行い、ポー川史跡自然公園を中心とするアイヌ文化関連の歴史遺産に対する知識・認識・価値づけなどを把握するとともに、同公園で開催されているイチャルパ（慰霊祭）をはじめとする同地域のアイヌ民族の文化・歴史に対する意見や見解などの収集を行った。この調査により、標津町内 7 地区の全ての聞き取り調査を完了することができた。また同調査の最終日には、アイヌ民族の神話を交えた天文認識に関するプラネタリウム企画を後藤明・南山大学教授と共催した。この企画では、標津町周辺在住の 50 名近くの住民の参加を得ることができ、申請時に計画していた本研究の成果に基づく社会教育としての地域還元を実践することができた。
他方、同年度は、これまで協力関係を構築してきた平取町二風谷地区においてアイヌ文化振興事業に取り組んでいる現地在住の研究グループと、国立民族学博物館の「泉靖一アーカイブ」に所蔵されているアイヌ民族関連の資料・データの再検討を実施した。この資料調査によって、詳細な家系図や土地利用などのデータが数多く含まれていることを確認するとともに、現在推進されている「イオル再生構想」などのアイヌ文化振興事業に当該資料・データを活用する可能性を検討した。

以上のような調査研究を基に、本研究の総まとめとして、次のような研究成果を公開・提示することができた。まず 2020 年度にチェコ・プラハで開催される WAC（世界考古会議）9 で、アイヌ民族と台湾原住民を対象とした公共人類学・考古学のセッションを、陳瑪玲・台湾国立大学教授と共同で企画・申請し受理された。またこの他、本研究に関連する学術論文が学会誌に掲載されるとともに、国内外の学会・研究集会で報告を行い成果の一端を提起することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 大西秀之	４．巻 46(13)
２．論文標題 モノとヒトが織りなす技術の人類誌／史：考古学の可能性をめぐる民族誌フィールドからの応答	５．発行年 2018年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 170-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大西秀之	４．巻 -
２．論文標題 プロセス学派とポストプロセス学派の相克をめぐる人類学的布置	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ムカシのミライ：プロセス考古学とポストプロセス考古学の対話（阿子島香・溝口孝司監修、勁草社）	６．最初と最後の頁 125-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大西秀之	４．巻 8
２．論文標題 景観に刻まれたソビエト体制の展開と崩壊：ナーナイ系先住民の集落景観を形作った土地利用と生計戦略	５．発行年 2018年
３．雑誌名 年報人類学研究	６．最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大西秀之	４．巻 -
２．論文標題 アイヌ・エコシステムの舞台裏：民族誌に描かれたアイヌ社会像の再考	５．発行年 2018年
３．雑誌名 寒冷アジアの文化生態史（高倉浩樹編、古今書院）	６．最初と最後の頁 25-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松森智彦・大西秀之・アンドレイ P．サマル・佐々木史郎	4．巻 13(1-2)
2．論文標題 衛星写真及び地理情報を活用した民族誌調査の事例：ロシア極東のコンドン・ウリカ ナツィオナリノエ村を対象に	5．発行年 2018年
3．雑誌名 文化情報学	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Yasuhisa Kondo, Akihiro Miyata, Ui Ikeuchi, Satoe Nakahara, Ken'ichiro Nakashima, Hideyuki Onishi, Takeshi Osawa, Kazuhiko Ota, Kenichi Sato, Ken Ushijima, Bianca Vienni Baptista, Terukazu Kumazawa, Kazuhiro Hayashi, Yasuhiro Murayama, Noboru Okuda, Hisae Nakanishi	4．巻 39
2．論文標題 Interlinking open science and community-based participatory research for socio-environmental issues	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Current Opinion in Environmental Sustainability	6．最初と最後の頁 54-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） org/10.1016/j.cosust.2019.07.001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 大西秀之
2．発表標題 アイヌ文化に対する地域住民の多様な語り：北海道標津町7地区における聞き取り調査を事例として
3．学会等名 日本文化人類学会第52回研究大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 ONISHI, Hideyuki
2．発表標題 Ainu historical heritage as common property of the local community
3．学会等名 CHAGS (Conference on Hunting and Gathering Societies)XII（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 大西秀之
２．発表標題 景観認識としてのアイヌ文化遺産：北海道 標津町における地域住民の語りを事例と して
３．学会等名 生態人類学会第24回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasuhisa KONDO, Hideyuki ONISHI, Yoko Iwamoto
２．発表標題 Is ‘culture’ a buzzword? Ontological challenge of an interdisciplinary project on the cultural history of early modern humans in Asia
３．学会等名 CAA (Computer Applications and Quantitative Methods in Archaeology) 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 大西秀之
２．発表標題 地域共有資源としてのアイヌ文化史跡の可能性：ポー川史跡自然公園を中核とする文化的景観を事例として
３．学会等名 日本文化人類学会第51回研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 大西秀之
２．発表標題 アムール川流域におけるナーナイ系住民の漁撈活動：GIS調査データを中心に
３．学会等名 日本シベリア学会第5回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hideyuki ONISHI
２．発表標題 Tribalism or Chiefdom?: The formation of Ainu society by influences from outside worlds
３．学会等名 Out of Eurasia, International Academic Meetings in Mexico: Monuments, Art, and HumanBody（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

同志社女子大学研究者データベース（大西秀之） http://research-db.dwc.doshisha.ac.jp/rd/html/japanese/researchersHtml/3034/3034_Researcher.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	石村　智 (Ishimura Tomo) (60435906)	独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・無形文化遺産部・室長 (82620)	専門：文化遺産学 役割：文化遺産の比較検討
研究協力者	小野　哲也 (Ono Tetsuya)	標津町教育委員会・ポー川史跡自然公園・主任学芸員	専門:考古学 役割:アイヌ文化遺跡の活用